

# 「技術とジェンダー」を歴史化する —先行研究の概観とジェンダー研究の展望—

石 井 香 江

## The Historicizing of “Technology and Gender” : a Literature Review and the Perspective of Gender Studies

Kae Ishii

### 抄 録

本稿では、筆者の研究上の問題意識が生れた日本の現状と歴史的背景について概観した。まずは「技術とジェンダー」という視点で今日の問題点、つまりIT技術とその知識を開発・伝授する側、IT技術を扱う通信従事者についても、専門知識を要する業務には男性が、顧客への応対業務に女性が集中している事実を指摘した。さらに、この現状を説明する新しい方法について模索し、性別職務分離や職場で実際に見られる男女の「特徴」が自明なものではなく、歴史的に構築されたものと捉えるジェンダー視点の重要性を提起した。

従来のジェンダー研究は男女の経験を重要視し、立場を異にする人々や方法論を締め出す傾向にあった。そこで最後に、ジェンダー研究を外に開くため、技術をジェンダーを含む社会的諸力の相互作用によって発展すると捉える方法的視角を紹介した。ここに、ジェンダー研究と技術の社会学的研究が、有益な対話をする可能性が宿っているのではないだろうか。

キーワード：“技術とジェンダー”

ジェンダー研究

技術の社会学

情報通信技術

性別職務分離

## 1. 問題の所在

### (1) 科学技術は男性のもの？

政府の男女共同参画会議が2005年にまとめた中間整理によれば、女性の参画が遅れている分野として科学技術部門が挙げられている。科学技術系の研究者に占める女性の割合は人文科学を含めても11.2% (2003年) に過ぎず、理工系に限るとわずか4%である<sup>1)</sup>。そこで内閣府は科学技術分野への女性進出を促すことを狙い、女子高校生や女子大学生を対象に「チャレンジ・キャンペーン」<sup>2)</sup> (毎日新聞社共催) を実施することを発表した。その後このキャンペーンは、科学技術分野の職業の魅力を訴えるため、全国規模で女子高校生向けの講演会などを開催している<sup>3)</sup>。職場や日常生活でIT (情報通信技術) が不可欠な存在となるにともない、IT を研究開発する研究者・技術者の需要が日本でも高まって久しいが、科学技術に関わる仕事をするエンジニアや研究者の多くが男性で占められている。エンジニアや研究者を育てる大学などの高等教育機関でも、教授をはじめ学生も男性が中心である。その理由を『毎日新聞』(2005年5月17日) は「家庭や学校に「女性は理工系に進むべきではない」という「偏見」が根強く、関心があっても文系の進路を選ぶ女子も多い」と説明しているが、21世紀の現在においても、女性は理系に向かないという「偏見」は、日本の家庭や学校でなおも強固なのだろうか。

### (2) IT と女性：電信・電話という先駆的事例

近年のITの生活への浸透には目を見張るものがある。最近では、小学生でさえも友達とのつきあいや防犯用に携帯電話を利用するのが一般的である。また大人になっても、電話のみならずインターネットで情報収集をし、チャットや買い物を楽しむだけでなく、場所や時間を選ばないITの特性を活かし、育児や家事などをしながら、自宅で投資や在宅ワークを行なう女性も増えている<sup>4)</sup>。ITの持つ可能性は確かに未知数だろう。しかし、だからといってITが女性の社会進出とエンパワーメントを促すと、一概に言えるのだろうか。

ここで、冒頭で記したように、ITを開発する側には依然として男性が多く、女性がITを扱っている場合でも、技術自体に関する専門知識をあまり要しない顧客への対応業務に集中しているという現実があることを思い出したい。ハードな技術の開発者や管理者である男性と、ソフトな技術の消費者や操作者である女性という男女の分業は、男女の「適性」に由来するのか。そうでないとすれば、いかなる社会的機制によって生じたのだろうか。こうした問いに取り組む際の一つの補助線として、次にITの先駆的事例を取り上げたい。

19世紀後半から現在に至る時期は、ITの未曾有の発展によって特徴づけられるが、19世紀末に電話が発明され、一般に使用されるにともない、女性が活躍する新しい職域が生み出された。日本もその例外ではない。電話が導入される以前、遠隔地間の通信には電信が利用されていた。この電信を操作する女性がきわめて少数であったの対し、電

話交換手は早い内から女性中心の職業となった。女性労働がまだ一般的でなかった時代に登場した電話交換手は、教師や女工、タイピストと並ぶ女性労働の先駆として位置づけられるだろう。以前に比べれば少なくなったが、現在も大学や会社で電話の呼び出しや取次ぎをする電話交換手が存在し、NTTをはじめ一般企業でもテレフォン・オペレーターが番号案内をはじめ、ハローダイヤルやテレマーケティングなどの各種対顧客サービスに携わっている。

実際に、2005年度の国勢調査を見ると、日本全国の通信従事者（通信技術従事者、電話交換手、郵便・電報外務員、その他の通信従事者）は計16万6千800人である。この中でとりわけ目を引くのは、電話交換手（有線・無線電話の呼出し・交換・取次ぎの仕事に従事する者）に占める女性の比率が約98%である一方、通信技術従事者（有線・無線通信設備を操作する仕事に従事する者）では約6%、郵便・電報外務員（郵便物の集配及び電報の配達の仕事に従事する者）では約12%、その他の通信従事者（航空管制官、航空管制通信官、電波監視官、放送雑音防止技術員、映像調整員など）では約28%という、女性比率の職種間の違いである。電話交換手に占める女性比率がいかに高いかということが分かるだろう<sup>5)</sup>。ILOの定義によれば、女性従業員が80%どころか90%以上を占める電話交換業務はまさに「女性職」であり、有線・無線通信設備の操作は「男性職」である<sup>6)</sup>。つまりこの事例一つをとってみても、生物学的に定義される「性別」を軸にした職務分離<sup>7)</sup>が、依然として存在しているという事実を確認することができる。

以上、現代日本では科学技術分野で活躍する女性比率がまだ低いという事例を紹介し、それが何に由来するのか問題提起した。その理由を探るためにITの先駆的事例である電信・電話を取り上げた。歴史を振り返ると電信は主に男性、電話交換は主に女性が担ってきたが、現在もこの性別職務分離が通信従業者の中に存在する。次に、電信・電話交換業務の性別職務分離がなぜ起きるのか、これは従来どのように説明されてきたのか、先行研究を検討することにしたい。

## 2. 先行研究の概観

### (1) 到達点と課題

1980年代に日本や欧米諸国では、携帯電話やインターネットをはじめとするITの普及を背景に、技術の社会史や文化研究の領域などでも電話・電信が研究されることが多くなった<sup>8)</sup>。しかし日本においては、主に経済・経営史的観点から、電話・電信網という社会基盤インフラストラクチャーの整備といった供給サイドの問題や、その利用状況などの需要サイドの問題、電気技術者や技師の育成過程に関心が払われ、電信・電話事業の末端に位置する現業、とりわけ戦前に現場で活躍した電話交換手や電信技手に関する社会史的研究が手薄だったといえる<sup>9)</sup>。近年では、欧米の先行研究に学び、メディア論やカルチュラル・スタディーズの文脈で技術開発者が予測し得なかった女性利用者の創造的な電話利用法や、ネットワークとしての電話交換手の主体的役割に目を向ける研究が生まれている<sup>10)</sup>。しかし戦前期については、紡績産業の女工に関する労使関係研究が多数存在する

のに比べて<sup>11)</sup>、電話交換手に関する同種の研究は、ほとんどない状況である。

日本の先行研究を整理してみると、郵便や、電信・電話という近代技術の登場が、近代日本の政治・軍事、市場経済、ひいては日常生活にどのような影響を与えたのかを、経済史やカルチュラル・スタディーズの立場から検討する、優れた諸研究が発表されている<sup>12)</sup>。ところが、組織やその成員に着目する研究は、この分野ではほとんどない。社会基盤としての電信・電話網や施設の運営、電信・電話網の経営とその収益を管理する組織を継続していくには、それぞれの職務にふさわしい労働力を確保・育成することが重要である。日本の通信省は鉄道省と並んで膨大な現業部門——いわゆる「ノン・エリート」——を抱え、多くの男性労働者を有したことで知られているが<sup>13)</sup>、通信省は鉄道省とは異なり、電話交換手、事務員、少数ではあるが電信技手として女性を早期に雇用していた点特徴的である。彼女達の多くは三等郵便局に勤務し、低コストの郵便サービスを支えていた。電信・電話局で働く女性の数も、電信・電話事業が拡張する20世紀初頭に急速に増加する。中でも電話交換業務は、「歴史的発生も相当古く、数の多い点からみても主要な婦人の職場の一つ」であり、日本の「産業とともに発展してきた電話事業はほとんど婦人の手で支えられてきた」のである<sup>14)</sup>。つまり、通信事業の歴史を研究する場合、女性と事業の関係に踏み込まざるをえないが、女性従業員たちがどのような労働市場を通じてどこから供給され、どのような労働条件下で働いていたのかを、男性との対比で詳しく考察する研究は、管見の限り日本にはまだ存在しない<sup>15)</sup>。

松田裕之は、アメリカの電話交換手に関する労働史・社会史の先行研究を検討して、「残念ながら、わが国の電話交換手になんらかの歴史的視座——電話史、労働史、女性史、技術史など——からアプローチし、これをひとつの魅惑的な《像》として描いたり、共感をかきたてる文体で物語を編むという試みは、ほとんどみられないというのが現状である」と、日本の研究状況を批判的に振り返っている。確かに、今のところ日本では、戦前の電話交換手について事実を伝える資料は、旧通信省・郵政省の調査資料、政府や公社が編纂した事業史<sup>16)</sup>、日本各地の支局が編纂した社史、『交通』や『通信協会雑誌』といった通信従業員の定期刊行物、労働科学的な立場からの調査や<sup>17)</sup>、当事者の経験を織り込んだドキュメントなどに限られている<sup>18)</sup>。しかしながら、問題は史資料の保存状態だけにあるのではない。むしろそれよりも、事業の経営形態、職業としての形成・展開過程が大きく異なる日米の電話交換手の歴史を、同じ視点から検討すること自体にこそ問題があるのではないだろうか。

そこで、戦前の電話事業の経営形態が同じく国営であり、また近代化の進度も電話の導入も他の欧米先進諸国と比べて遅かったドイツに目を向ける必要があるだろう。最近10年間のドイツにおける成果の中で、筆者の関心と重なる研究の到達点として位置づけられるのが、1995年にニーンハウスがハノーファー大学歴史学科に提出した教授資格取得論文『父なる国家とその補助手：ドイツ郵便の女性労働をめぐる政治（1864－1945）』である。ニーンハウスは電話交換業務を「女性化」した政治決定過程を検討し、この過程に関与した女性郵便・電信官吏同盟の動きにも注目している点で秀逸である。

しかし、本書の分析対象は電話交換手为中心で、少数の女性電信技手、女性の現場監督や郵便局長など他の職種との比較が手薄である。また、性別職務分離の原因をジェンダーに関する社会通念、男性従業員側の抵抗、安価な労働力を求める経営側の経済的動機や政治的配慮に求めており、男女間に見られる電信技術の習得機会の相違や、ある特定の技術と「男らしさ」とが結びつくプロセスやメカニズムに注目するような社会学的分析は今後の課題として残されている<sup>19)</sup>。

事実、日本をはじめとする欧米の社会史研究において、電話交換手に関する研究蓄積が数多くあるのに比べ、電信技手に対する言及は僅かしかない<sup>20)</sup>。電話交換手に関する研究は、この職業が「女性化」した事実について必ずといっていいほど触れてはいるが、その理由や経緯について、説得的な説明が与えられているとはいえない。この説明の仕方は大きく分けて三つある。一つ目は、女性が低賃金労働者であるという事実の他に、高い女性の声が聞き取り易いばかりでなく、女性の動きは緻密で、加入者に対する対応も丁寧であるという本質主義的な説明の仕方、二つ目は、新しい技術である電話の導入で女性による操作も可能となったという技術決定的な説明の仕方<sup>21)</sup>、そして三つ目は、女性は低賃金である上に管理も容易であり、経営者にとっては好都合であったとする、労使関係に目を向けた説明の仕方である<sup>22)</sup>。社会学者の吉見俊哉は、電話交換業務が女性化される以前に、この業務に従事していた若い男性たちに注目する。吉見によれば、若い男性たちが電話交換業務を「腰掛け的な仕事」とみなし、経営側の求める規律に従わなかったことが、男性が電話交換業務から締め出され、電信業務に集中した背景だという<sup>23)</sup>。吉見は電話交換業務が「腰掛け的な仕事」と見なされていた社会・歴史的背景、若い男性たちの実像、経営側はもちろん電話交換手との関係を明らかにしていないが、重要な視点を提示している。つまり、特定の技術と性別を結びつける過程や機制を明らかにするには、生物学的に定義される「性別」ではなく、社会的に定義される「ジェンダー」の視点を導入し、様々なアクター間の相互作用に目を向けることの重要性である。電信・電話には社会が共有する「男らしさ」「女らしさ」のイメージ、すなわち「ジェンダー」が付与され、これに多かれ少なかれ依拠して、電信業務には男性、電話交換業務には女性が配置されてきた。これを、ジェンダーによる技術と労働の差異化のプロセス、「ジェンダー化」と捉えることができるのである。

以上、関連する先行研究を概観し、問題点や今後の課題を指摘した。そして、性別を自明なものとする状況から、性別は構築されたものであると捉える認識の転換、「ジェンダー化」のミクロなプロセスやメカニズムに光を当てる重要性を強調した。つまり、性別職務分離の歴史のプロセスやメカニズムを解き明かすためには、社会学的な視角や方法の導入が必要である。次に「技術とジェンダー」の関係に注目する研究動向を概観しながら、その可能性を模索したい。

## (2) 「技術とジェンダー」への社会学的アプローチ

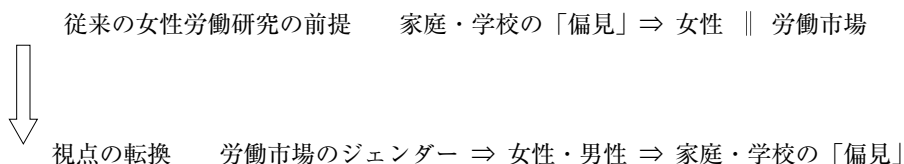
冒頭で触れたように、日本では現在でも科学技術分野への女性の参画が立ち遅れてい

るが、その理由として「偏見」の強さが指摘されることが多い。しかし、女性は理系に向かないとする決めつけが日本の家庭や学校では依然として強いとする前提は、確かな根拠を欠いているのではないだろうか。もちろん、住む地域、社会的出自によって個人差があり、こうした「偏見」がいまだにリアリティを持つケースがあることも考慮しなければならないが、それ以上に、人材を育成する高等教育機関や、人材の受け入れ先である労働市場が抱える諸問題——例えば企業内部の人事管理制度や賃金制度、教育訓練、職務配置などフォーマルな実践からインフォーマルな日常的慣行など——を看過できないのではないだろうか。つまり筆者は、技術に関わる仕事をするエンジニアや研究者を生み出す大学などの高等教育機関、そして人材を受け入れる労働市場に目を向け、女性が技術分野に参入する障壁となる要因を探る必要性があると考えており、子どもをしつけて社会に送り出す家庭や、子どもを高等教育機関に送り出す小・中・高等学校に、「偏見」=ジェンダー化された規範が存在するか否かは、筆者の中心的な問題関心ではない。

課題をこのように限定したとき、大きな示唆を与えてくれるのが、社会学者の木本喜美子が提起している「労働過程へのジェンダー視角の導入」という視点である。木本は、家事・育児役割に規定された女性の「特殊性」を強調する、従来の女性労働研究に見られる傾向を批判し、「個々の企業レベルの人事管理制度や賃金制度、教育訓練、職務配置」といった、企業が上から展開する実践と、それを受ける「男女労働者のあり方」の両方を、ケーススタディを通して把握する必要性があるという。これは下の図にまとめられたように、労働市場における女性の地位を、主として家事・育児の役割を女性に求めるという家庭・学校の「偏見」から説明するのではなく、あくまで労働市場におけるジェンダー間の力関係が主要因であるとして、それが家庭や学校の女性をめぐる認識に影響を及ぼすという捉え方である<sup>24)</sup>。確かに、家庭や学校が、労働市場が労働力に何を期待しているかを予想して、その期待に添うように子どもをしつけ、進路指導するということも十分に考えられうる。

ところが、これまでは労働市場のポリティクス、さらには職場の実態が等閑視され、家庭や学校に存在するとされる「偏見」に主に光が当てられていたように思われる。仮に家庭や学校に「偏見」が存在するとしても、この「偏見」が一体どのようなプロセスを経て生れたのか、そのメカニズムにまで目を向ける必要があるだろう。

図 労働過程へのジェンダー視角の導入



### 1) 技術の社会的構築という視角

ここで再び冒頭の問いに立ち返りたい。女性と男性はなぜ異なる技術を用いる仕事に従事しているのだろうか。これは、本人たちの自由意志による選択なのであろうか。あるいは、女性に対する社会的期待が、働いている本人や同僚、雇用主の選択に影響を与えているのであろうか。さらにはまた、労働市場にジェンダーが深く埋め込まれ、それが、技術の配置に影響を与えているためであらうか。筆者が着目するのは、最後に挙げた社会学的な見方である。

筆者が「技術とジェンダー」という問題に、社会学的にアプローチする必要があると考えているのは、社会学は経済学と並んで、ある技術がなぜ発展することが可能だったのか、その要因について様々な角度から考察してきたからである。社会学は、技術というものが、置かれた環境に左右されず自己発展するという考えに異議を申し立ててきた。技術の中に発展の物理的可能性が存在しても、社会がそれを受け入れなければ、その技術は発展しないのである。つまり、技術は社会的諸力の相互作用によって発展すると考えることができる。社会学者ヴェルナー・ラムマートの言葉を借りれば、「技術の持つ価値とされる大きさ、速さ、厳密さは、ある特定の時代と文化と結びついた思想 (Konzept) と不可分」<sup>25)</sup>なのである。

例えば文化社会学の特殊部門とされる技術社会学は、技術・文化・社会という三つの要素がどのように影響し合うのか、そのメカニズムの分析に力を注いできた。これが技術の社会的構築という捉え方であり、技術決定論を乗り越える上で重要な視点である。中でも文化に着目するアプローチは、技術の発展のダイナミズムとその方向性に及ぼす文化的影響、例えば宗教や社会的規範、企業・組織文化や研究者・エンジニアの理念に目を向ける<sup>26)</sup>。ここでいう「文化」とは、ある集団が共有する価値、規範、行動様式などを意味している<sup>27)</sup>。こうした「文化」概念の中には、「ジェンダー」をめぐる価値規範も含まれる。近年ではこのような問題視角から、特に欧米において「技術とジェンダー」の関係に目を向ける研究も蓄積されつつある。

### 2) 「技術とジェンダー」研究の地平

社会的に構築されるものとして技術を捉える研究は、主にサイエンス・スタディーズの中から生まれ<sup>28)</sup>、技術をジェンダー視点で捉える研究は、産業社会学、とりわけ労働過程をめぐる議論から発展した<sup>29)</sup>。前者の研究ではジェンダー視点がまだ十分に生かされておらず、「男らしさ」のイメージが、技術の大きさや重さなどの設計及び技術革新とは無関係の自律的な要素と見なされてきた<sup>30)</sup>。これとは対照的に、後者の研究を起源とする「技術とジェンダー」に関する研究は、性別職務分離、職場と労働組合の政治、技術の設計に与える「男性中心主義」の影響に注目した<sup>31)</sup>。例えば、女性は長らく技術と相容れない存在として捉えられる一方、男性は技術に自己同一化し、技術は「男らしさ」と不可分なものとされてきた<sup>32)</sup>。このように、技術に対して女性が男性とは異なる関係性を結んでいること、それがどのように女性を技術の世界で周縁化してきたかとい

う点に光が当てられたのである<sup>33)</sup>。こうした試みは、技術が中立的な立場で存在するのではなく、技術の使用法、その操作者、技術革新の行方などにジェンダーがインパクトを与えうることを明らかにした<sup>34)</sup>。

ここでは、「技術革新」が女性に与えるインパクトをテーマとする研究に注目したい。このテーマは近代化・産業化という歴史学や社会学の重要なテーマともつながりが深いだけに、研究が比較的蓄積されている。しかしこうした研究は、ジェンダー視点が深化する以前、一般的ではなかった。それは、近代以前は男女の活動領域が分離されていたことが前提とされ、職場のジェンダー関係に対する技術のインパクトよりも、家庭内での母親、消費者としての女性に注目が集まっていたからである<sup>35)</sup>。職場に光を当てる研究にしても、機械化の遅れた家内産業と女性労働を結び付ける傾向があった。技術革新によって女性が働く機会が生まれ、この職域が「女性化」する傾向を指摘する研究が発表されるようになったのは1980年代末からである。

例えば、世紀転換期にはタイプライターが導入され、手書きをしていた男性に代わり女性が大量に事務職に参入するようになり、1920～30年代には家庭向けの消費財を製造する工場のアセンブリーラインに女性が投入された事実なども明らかにされた。この二つの事例が示すように、技術革新は従来手作業であったものを機械化し、「熟練」を要しないとされる仕事を創出することで、男性職を女性化するきっかけを作った<sup>36)</sup>。このような、技術革新のインパクトを肯定的に捉える研究が登場した背景には、この時期にコンピューター化が進展し、ジェンダー、地域性、階級などの旧来の階層構造が、より柔軟性に富んだネットワークに取って代わられるという期待が高まっていた状況がある。こうして1990年代にかけて、技術を利用する女性のエージェンシーや、女性のエンパワーメントを強調する「サイボーグ・フェミニズム」が登場した<sup>37)</sup>。しかしながら、技術革新による女性の就労機会や女性職の創出を肯定的に捉えるだけでよいのだろうか。こうした現象を、より広い文脈の中で分析的に捉える必要があるはずである。

例えば1970年代後半から1980年代初頭に発表された「オフィス・オートメーション」に関する研究は、新しい技術の導入は女性に利益をもたらすのか、あるいは女性の担う仕事を「脱熟練化」するのかを議論した。そこから、技術革新は「脱熟練化」を招き、女性が男性に取って代わる契機として捉える研究も出現した<sup>38)</sup>。しかしその後、「熟練」という概念は批判的に捉え直され、技術革新と女性との関係がはるかに複雑なものであることが明らかにされた。

「熟練」とはある課題をこなす能力として定義されるが、これはトレーニング、時間の投入量、知識の伝達等など、多様な要素によって培われる。これに加えて、「熟練」の定義は、ある仕事に「熟練」しているとは何かを議論する中で形作られるものである。しかし、この議論の主たる担い手が男性と女性のいずれかに偏れば、「熟練」概念はジェンダー・バイアスを孕む可能性を持つ。このような様々な要素が絡み合う中で、これまで女性が担う仕事は「非熟練」「セミプロ」として分類される傾向にあった<sup>39)</sup>。例えば、各種の技術を動員する料理や家事を主婦が上手にこなしたとしても、それは当



たり前の営みとされ、「熟練」として捉えられはしない<sup>40)</sup>。つまり、技術自体ではなく、技術を導入する社会に存在する諸条件が、その技術を誰が操作するのか、技術を扱う際の何が「熟練」なのかを決定するのである。

つまり、技術革新のインパクトを肯定的に評価するだけでは不十分で、技術革新がなぜ女性の就労機会と女性職を創出するのかという点まで分析する必要があるが、それを機械化が作業を「脱熟練化」し、「不熟練」な女性でも作業が可能になったと捉えるのかどうか争点となっていた。社会学者のシンシア・コウバーンは、ロンドンを所在地とする四つの新聞社の印刷部門を取り上げ、1980年代初頭にインタビューを実施している。彼女は綿密なケーススタディを行なう中で、上の問いに一つの回答を与えている。コウバーンは、技術は社会的に形作られるという構築主義的な立場で、技術は男性によって女性を排除するように作られており、職場でもその技術を男性が独占していること、その結果、女性は技術を扱う世界で周縁化され、補助的仕事を担わされているという<sup>41)</sup>。女性労働力を一律に「不熟練」と捉えることは単純化であり、女性を技術の世界から遠ざけるメカニズムが存在するのだというコウバーンの到達点は、技術、ジェンダー、権力の複合的な相互作用を分析する可能性を拓いたといえる。

社会学者のジュディ・ワイクマンも、コウバーンの今から見れば静態的な視点（男性と女性、両者の関係性が変化しないものとして捉えられている）に若干の修正を加えながらも、コウバーンの問題意識と視角を引き継ぎ、近年「テクノ・フェミニズム」を提唱している。これは、「技術はジェンダー関係の源であり、同時にその結果である」という見方であり、<sup>42)</sup>技術はたんなる物質ではなく、その中に社会に存在するジェンダー関係が投影されており、その技術を用いることで、ジェンダー関係が再生産されるということの意味している。ワイクマンはこうした前提の下で、技術の中に埋め込まれたジェンダーを、科学的かつ動的に分析することを提起している。

技術を自律的な存在としてではなく、女性と男性、ジェンダー、職場組織、技術の社会的な位置づけが織り成すネットワークの結節点として捉える、二人の構築主義的なアプローチは示唆に富んでいる。

## まとめ

本稿では、筆者の研究上の問題意識が生れた日本の現状と歴史的背景について概観した。まずは「技術とジェンダー」という視点から見えてくる今日の問題点を提起した。つまり、IT技術とその知識を開発・伝授する側、IT技術を扱う通信従事者についても、専門知識を要する業務には男性が、顧客への応対業務に女性が集中している事実を確認した。さらに、こうした現状が何に由来するのかを説明する、新しい方法について模索した。そこで、性別職務分離や職場で実際に見られる男女の「特徴」を自明のものとしてではなく、それが歴史的に構築されたものであると捉えるジェンダー視点を、研究の中に組み込んでいくことの重要性を提起した。

ただし、ジェンダー研究は女性学と男性学の展開の中から生まれているので、女性と

男性という性別によってカテゴライズされた当事者の経験を、当然ながら重要視している。しかしこれが逆に、自身の経験やアイデンティティに対して多様なスタンスを取る人々に対して、高い障壁を築いてきたようにも思う。こうした問題を打開するために、ジェンダー研究を「外」（ここでは旧来の女性学や男性学とは立場を異にする人々や異なる方法論を指している）に開いていく必要性を感じている。それはジェンダー視点を軽視することではない。例えば本稿で紹介した、技術を独立した存在としてではなく、ジェンダーを含む社会的諸力の相互作用によって発展すると捉える方法的視角。ここには、ジェンダー研究と技術の社会学的研究が、有益な対話を継続していく可能性が宿っているのではないだろうか。

女性と男性というジェンダーを特権化することによって、家庭、学校、職場、政治など社会の様々な場の中で、あるいは、社会階層、エスニシティ、セクシュアリティ、地域、世代など様々な社会的差異との相互作用の中で、実はジェンダーのインパクトは一様ではなく、濃淡があるという重要な事実を見逃すことになりかねない。ジェンダー研究の究極的な目標が、ジェンダーによる不当な差別をなくし、各人の個性を生かしていくことにあるとすれば、その原因を他の社会的差異との関連で複合的に捉え、ジェンダーのインパクトに濃淡が生じる社会的背景を分析する必要があるだろう。そして、その知見をジェンダー研究の「外」にいる人々と共有することは、長期的な視点で見れば、変化をもたらす近道ではないだろうか。

## 参考文献

- 1) 内閣府男女共同参画局, 2005, 『平成17年版 男女共同参画白書』国立印刷局
- 2) 「内閣府男女共同参画局：チャレンジ・キャンペーン」(<http://www.gender.go.jp/c-challenge/index.html>)
- 3) 『毎日新聞』(2005年5月17日)
- 4) 国土庁大都市圏整備局 編, 1998, 『女性の就業に対するテレワークの可能性：東京近郊における女性の新たな就業形態に関する調査』大蔵省印刷局；萩原博子, 2000, 『儲かる！ インターネット活用秘伝：自宅のできる投資・貯蓄・ショッピング・保険 etc. 実践ガイド』小学館；堀真由美, 2003, 『テレワーク社会と女性の就業』中央大学出版部
- 5) 総務庁統計局, 2005, 『平成17年度国勢調査：抽出速報集計』
- 6) Anker, Richard, 1998, *Gender and Jobs: Sex Segregation of Occupations in the World*, Geneva: ILO; OECD, 1998, *The Future of Female-Dominated Occupations*, Paris: OECD.
- 7) 社会学者の木本貴美子は、生物学的な性別を軸にした職務分離に、社会的に構築された「ジェンダー」がインパクトを与えていることを踏まえ、これを「ジェンダー間の職務分離」と定義している。c.f. 木本喜美子, 1999, 「女の仕事と男の仕事：性別職務分離のメカニズム」『講座社会学 14 ジェンダー』東京大学出版会；木本喜美子・深澤和子 編著, 2000, 『現代日本の女性労働とジェンダー』ミネルヴァ書房；木本喜美子, 2003, 『女性労働とマネジメント』勁草書房
- 8) Pool, Ithiel de Sola (ed.), 1977, *The Social Impact of the Telephone*, The MIT Press: Cambridge; Becker, Jörg (Hrsg.), 1989, *Telefonieren*, Marburg; Teuteberg, Hans-Jürgen, 1998, *Vom Flügeltelegraphen zum*

Internet, Stuttgart.

- 9) 近代日本に郵便・電信・電話が登場したことで、日本の政治・軍事・市場経済・日常生活がどう変容したかについて検討したのが、石井（1994）；欧米のカルチュラル・スタディーズの先行研究をサーヴェイし、文化という側面からのアプローチを模索しているのが、吉見（1995）；近代日本の電信・電話の普及の経緯と、それが市場経済に与えたインパクトについて考察したのが、藤井信幸,1998,『テレコムの経済史：近代日本の電信・電話』勁草書房
- 10) Pool（1977）；Martin, Michele, 1991, "Hello, central?", Montreal: McGill-Queen's University Press; Fischer, C. S., 1992, *America Calling: A Social History of the Telephone to 1940*, University of California (= 2000, 吉見俊哉・松田美佐・片岡みい子 訳, 2000, 『電話するアメリカ：テレフォンネットワークの社会史』NTT 出版)；Green, Venus, 2001, *Race on the Line: Gender, Labor, and Technology in the Bell System 1880-1980*, Duke University Press.
- 11) 廣崎真八郎,1967,『日本女子労務管理史』尊分堂出版部；大河内一男 他,1956,『婦人労働』弘文堂
- 12) 石井（1994）；吉見（1995）；藤井（1998）；石井寛治,2002,『情報化と国家・企業』山川出版社
- 13) 戦前の国鉄労働者において、教育や学歴、社会階層が持つ意味については、吉田文・広田照幸 編, 2004, 『職業と選抜の歴史社会学：国鉄と社会諸階層』世織書房 で詳細に研究されているが、女性労働者への言及が本書では抜け落ちており、その理由についても説得的に説明されているわけではない。
- 14) 労働省婦人少年局,1953,『婦人労働調査資料 第16号 電話交換作業における婦人労働の実情—実態調査報—』：182 0.6-0.7%というごく少数の男性が雇用されるが、その他は全て女性が配置されるという傾向は、電話局でも増私設電話でも確認することができた（同,2頁）。
- 15) 石井寛治,2000,「近代郵便史研究の課題」『郵便史研究』（9号）：1-11
- 16) 日本電信電話公社東京電気通信局 編,1958-1964,『東京の電話』電気通信協会
- 17) 例えば通信省通信局の嘱託医学生であった寺沢巖男が実施した「電話交換手能率調査」が挙げられる。
- 18) 山中郁子「ドキュメント・交換台に生きた女性たち-3-電話交換手の誕生と生い立ち」『労働運動』（通号 371）[1996.03]：157-164；山中郁子,1997,『交換台に生きた女性たち』新日本出版；三浦豊彦「労働観私論（15）聞き書き労働観（7）：電話交換手」『労働科学』73（2）[1997.02]：59-65
- 19) Nienhaus, Ursula, 1995, *Vaterstaat und seine Gehilfinnen: Die Politik mit der Frauenarbeit bei der deutschen Post (1864-1945)*, Frankfurt am Main.
- 20) ほぼ唯一の例外として、松田裕之, 2001, 『明治電信電話ものがたり』日本経済評論社；松田裕之,2004,『通信技手の歩いた近代』日本経済評論社が挙げられるだろう。アメリカの文脈では、Gabler, Edwin, 1988, *The American Telegrapher: A Social History, 1860-1900*, Rutgers University Press; Jepsen, Thomas, 2000, *My Sisters Telegraphic: Women in the Telegraph Office, 1846-1950*, Ohio Univ.
- 21) 種田明,1993,『ドイツ技術史の散歩道』同文館出版
- 22) 日本電信電話公社東京電気通信局 編, 1958-1964, 『東京の電話』電気通信協会；石井寛治, 1994, 『情報・通信の社会史』有斐閣
- 23) 吉見俊哉, 1995, 『声の資本主義：電話・ラジオ・蓄音機の社会史』講談社選書メチエ：120-121
- 24) 木本喜美子, 2003, 『女性労働とマネジメント』勁草書房：20-30
- 25) Rammert, Werner, 1993, *Technik aus sozialer Perspektive*, Opladen: 38
- 26) Rammert, Werner, 1990, "Telefon und Kommunikationskultur. Akzeptanz und Diffusion einer Technik

- im Vier-Länder-Vergleich," in : *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, Heft 1 : 20-40
- 27) DiMaggio, Paul, 1994, "Culture and Economy," in : Smelser, Neil (ed.), *Handbook of Economic Sociology*, Princeton University Press : 27-28
- 28) Bijker, Wiebe and Law, John. (ed.), 1992, *Shaping Technology, Building Society*, Cambridge.
- 29) West, Jackie (ed.), 1982, *Women, Work, and the Labour Market*, London.
- 30) Berg, A.-J., 1992, "Technological Flexibility – Bringing Gender into Technology, Or Was It the Gender Way Round?," STS working paper 15/92, Trondheim, Centre for Technology and Society.
- 31) Wajcman, Judy, 1991, *Feminism Confronts Technology*, Cambridge.
- 32) Cockburn, Cynthia, 1983, *Brothers. Male Dominance and Technological Change*, London ; Wajcman, Judy, 1991, *Feminism Confronts Technology*, Cambridge ; Cockburn, Cynthia & Ormrod, Susan, 1993, *Gender & Technology in the Making*, SAGE Publications.
- 33) Hacker, Sally (ed.), 1990, 'Doing It the Hard Way' : *Investigations of Gender and Technology*, Boston and London ; Cockburn, Cynthia, 1986, "The Relations to Technology," in : Crompton, Rosemary (ed.) *Gender and Stratification*, Cambridge : Polity Press : 78
- 34) Cockburn, Cynthia, 1985, *Machinery of Dominance*, London ; Cockburn (1983)
- 35) Mohun, Arwen, 1998, *His and Hers : Gender, Consumption, and Technology*, Charlottesville : University Press of Virginia.
- 36) Berg, M., 1987, "Women's Work, Mechanization and the Early Phases of Industrialization in England," in : Joyce, P. (ed.) *The Historical Meanings of Work*, Cambridge : 64-98
- 37) ダナ・ハラウェイ他／巽孝之・小谷真理 編訳, 1991, 『サイボーグ・フェミニズム』トレヴィレ.
- 38) Hausen, Karin, 1978, "Technischer Fortschritt und Frauenarbeit im 19. Jahrhundert. Zur Sozialgeschichte der Nähmaschine," in : *Geschichte und Gesellschaft* , Jg. 4 ; Braverman, H., 1974, *Labor and Monopoly Capital : the Degradation of Work in the Twentieth Century*, London.
- 39) Wajcman, Judy, 1991, *Feminism Confronts Technology*, Cambridge : 37
- 40) Beechey, Veronica, 1982, "The Sexual Division of Labour and the Labour Process: A Critical Assessment of Braverman," in : Wood, S. (ed.), *The Degradation of Work. Skill, Deskillling and the Labour Process*, London : 63-64
- 41) Cockburn (1983)
- 42) Wajcman, Judy, 2004, *TechnoFeminism*, Cambridge : Polity ; Lerman, Nina E., Oldenziel, Ruth, Mohun, Arwen P., 2003, *Gender & Technology : A Reader*, The Johns Hopkins University Press.

[付記] 本稿は、文部科学省科学研究費補助金・平成18年度特別研究員奨励費による研究成果の一部である。

## Abstract

This paper discussed the current condition of Japan as well as its historical background in terms of Technology and Gender. First, the paper demonstrated a significant role gender played in the history of technology. Males hold most of the positions that require professional or technical knowledge (e. g., operators, engineers, professors developing and teaching information technologies), whereas most of the telephone operators, who have contact with users more often, are females. This paper tried to develop a new method for examining such a situation. It is suggested that sex segregation or the “characters” of women and men at work are not regarded as nature by the gender perspectives, rather they are historically constructed. Gender Studies tends to place more value on the experiences of women and men and barred out those who have different views and who use different research methods. It seems important to break this deadlock by explore Gender Studies with various perspectives (e. g., other positions, other methodologies). This paper introduced a new methodological perspective, in which information technology is considered to be developed by interactions of social differences existing in our society such as genders, social stratifications, ethnicities, sexualities, regions, and generations. Dialogues between Gender Studies and Sociology of Technology are believed to be beneficial, revealing new possibilities for further development of Gender Studies.

Key Words: “Technology and Gender”

Gender Studies

Sociology of Technology

Information Technologies

Gender Segregation at Work